会報No. 450

子どもの本 研究会

【私の一冊】 『オー・ヘンリー傑作選』 大津栄一郎／訳 （岩波文庫）

江口 一

私に「読書の喜び」を教えてくれた著者のひとりが、短編小説の名手、O・ヘンリーだった。「全短編272編のうちから傑作20選を選んだ」と銘打ったのが、この岩波文庫版の「傑作選」である。初版が1971年で、手元にあるのは第71刷まで版を重ねているので、「古典的名著」と言えるかも知れない。

最初にO・ヘンリーの作品に触れたのは中学生の頃、「二十年後」が英語の教科書の題材になっていたからだ。親友ふたりが「二十年後に会おう」という約束を果たしたその瞬間、彼我の二十年間が鮮明に浮かび上がったそのユーモアとプロットにうなったことを、今でも鮮明に覚えている。

そして、プレゼント費用を捻出しようと「大切なもの」をそれぞれ売り払ってしまったカップルを描いた「賢者の贈り物」▽いつもの客に淡い恋心を抱いたパン屋の店主の好意が悲劇を招いた「古パン」▽病弱の女性に生きる気力を取り戻させた老画家の傑作「最後の一葉」――などの文字通り「傑作選」を読みあさった。

なかでも気に入っている名作が「改心」だ。

金庫破りの心変わりが自らの幸福につながるかに思えたその時、危機が襲い、また金庫破りに戻って危機を脱する。代償として幸福を失いかけたが、その行為は別の人物の心変わりも誘発していた――「改心」が招く「改心」で物語は終わり、何度読んでも鮮やかで、さわやかで、余韻が残る読後感を楽しめる。

訳者による解説によると、O・ヘンリーの短編がなかでも愛読された国は、興味深いことに、旧ソ連だったという。そして最も多産だった1904年～05年にかけて書いた全ての作品が、ニューヨークを舞台にしたものだった。必ずしもハッピーエンドで終わるのではなく、ほろ苦さが残る作品も多い。しかし大都会を舞台に人生の喜怒哀楽を取り上げたその筆致は、訳者いわく「悪漢や詐欺師を描く筆にいちばんよく現れているように、まだ現代の病患を知らぬ、温かい、優しい眼で」描かれているのが特徴で、「人生になにかを求めて得られないで悲しんでいる者には、彼の作品はかならずそのなにかを与えてくれるはずである」という。同感だ。

それぞれの人生には生きるに値するすばらしい物語がある。久しぶりに読み返した「傑作選」は、改めてそんなことを思い起こさせてくれた。

（毎日新聞熊本支局長）

2024年 3月23日（土） 特定非営利活動法人 熊本子どもの本の研究会 発行

https://www.kodomonohon.org E-mail: info@kodomonohon.org

２０２４年度活動のご案内（会員募集）

（２０２４年４月～２０２５年３月）

熊本子どもの本の研究会は、「子どもにおはなしを　本のたのしみを」をモットーに、４月より41年目の活動を始めます。開講講座から始まる講座活動に加え、本年度は古代・中世日本文学研究者の森正人さんを講師に「日本の昔ばなしを読む」と題した３回連続公開講座を開催します。本講座では、会員へのオンライン配信も行います。子どもと大人の読書会、グリム童話の魅力などのオンラインでの活動に加え、事務所に併設する「びわの木文庫」では、蔵書の貸し出しと読書相談を行います。おはなしボランティア「びわの木」の活動も継続します。隔月（奇数月）で会報「子どもの本」を発行し、ホームページでも情報発信します。

活動の具体的内容は以下の通りです。詳細及び日程が決まっていないところは、会報及びホームページに掲載します。

２０２４年度におきましても会員としてご参加いただきますとともに、お仲間をお誘い下さいますようお願い申し上げます。

１　読書推進事業

①開講講座

日　時　４月24日（水）　10時～12時

会　場　熊本市立図書館集会室

今年度の活動紹介と「おはなし会をはじめるときに」のミニ講座があります。会員以外の方も無料でご参加いただけます。

②【公開】連続講座「日本の昔ばなしを読む」

講　師　森　正人さん

（熊本大学名誉教授、尚絅大学・尚絅大学短期大学部名誉教授、熊本子どもの本の研究会会員・理事、古代・中世日本文学研究者）

日　時　第１回　６月19日（水）

第２回　７月17日（水）

第３回　９月18日（水）

いずれも10時～11時30分

会　場　くまもと県民交流館パレア会議室９

参加費　会員　無料

非会員　３回通し１０００円

※会員に限りオンライン参加・アーカイブ視聴可

③【公開】おはなし会と小道具製作

講　師　田口祐子さん

（おはなしの会クレヨン代表、福岡県大牟田市在住）

日　時　８月４日（日）

10時～11時30分　おはなし会

13時30分～15時　小道具製作

会　場　熊本市民会館シアーズホーム夢ホール第３・４会議室

参加費　会員無料／非会員８００円（午前、午後いずれか片方のみ５００円）

④企画講座

会場はすべて熊本市立図書館（予定）

５月15日（水）　10時～12時

テーマ　連続講座事前学習会「ねずみのすもう」

10月16日（水）　10時～12時

テーマ　紙芝居を楽しもう

11月20日（水）　10時～12時

テーマ　児童書『虫のお知らせ』を読む

12月18日（水）　10時～12時

テーマ『初茜』に学ぶ①

「私の絵本づくり　赤羽末吉」

２０２５年１月15日（水）　10時～12時

テーマ　夢へ挑戦する少年少女を描いた絵本

２月19日（水）　10時～12時

テーマ　わらべうたであそぼう♪

⑤閉講講座

今年度を振り返って

３月12日（水）　10時～12時

会場　熊本市立図書館（予定）

⑥研究会活動検討会(オンライン)

研究会で実施する活動についての意見交換、新規活動の企画をします。会員以外の方も参加できます（要事前登録）。

偶数月の日曜日の10時～12時開催

4月14日、6月9日、8月18日、10月6日、12月8日、2月9日

⑦グリム童話の魅力(オンライン講座)（2回）

会員の竹内識晃さんがグリム童話のお話を毎回1話取り上げ、様々な読み方を紹介します。お話に関連した各国の類話や絵本も取り上げ、グリム童話の魅力に触れる講座です。

⑧子どもと大人の読書会(オンライン)（4回）

小学生、中学生がそれぞれ選んだ本を、大人（会員）も読んで一緒に感想を語り合います。年代、経験等による感じ方の違いを知る刺激的な時間です。

⑨びわの木文庫活動

毎月1回程度オープンし、児童書（蔵書約5000冊）の貸し出し、読書相談を行います。

2　子どもの健全育成事業

（ボランティア活動）

左記団体からの依頼に基づき、おはなし会を開催します。

熊本市立図書館、熊本県立図書館、熊本大学教育学部附属支援学校（小・中学部）熊本支援学校、その他小学校、児童館等

※ご依頼お待ちしております。

3　出版・販売事業（会報・ホームページ）

①会報の発行（隔月刊）

5月18日、7月20日、9月21日、11月16日、2025年1月18日、3月22日の6回発行し、ホームページに掲載します。郵送希望の会員の方には郵送もします。

②ホームページで情報提供

会報及び個別活動に関する情報をタイムリーに掲載します。会員専用の「会員の広場」では、各活動のより詳細な記録やアーカイブした講座記録などを掲載します。

4　ふるさとくまもと応援寄附金

（ふるさと納税）でのご支援のお願い

熊本県へのふるさと納税の際の使い道として、当研究会の活動支援を選択していただくことができます。いただいた寄付は、公開講座の開催などに活用しております。熊本県へのふるさと納税の際に、是非ご検討願います。ふるさと納税する際の支援団体指定の方法については、研究会ホームページをご参照ください。

5　年会費（2024年4月～2025年3月）

正会員（個人）　：　4000円

賛助会員（団体）：　10000円

ご寄付でのご支援もお待ちしております。

ご入会及びご寄付にあたっては、左記口座宛にお振込み願います。

ゆうちょ銀行

口座番号：01920-4-12211

口座名　：熊本子どもの本の研究会

振込の際、通信欄に以下を記載ください。

①氏名、②電話番号、③住所、④メールアドレス、⑤備考（会報の郵送希望など）

ご質問等は、左記宛にお願いします。

メール：member@kodomonohon.org

（横田　真）

◆講座報告

テーマ　**「昔話はおもしろい！」**

日　時　1月18日(水) 10時～12時

会　場　熊本市民会館

　　シアーズホーム夢ホール会議室

参加者　10名

担　当　辻　由美

●「花咲か爺」のお話について

お話が成立したのは室町末期から江戸初期といわれている。長く語り継がれてきた話だが、日本国内でも色々内容が違って伝わっている。例えば、婆が川から拾った香箱に子犬が入っていたり、流れてきた柿の実や、赤い小箱等から子犬が現れたりすることもある。また、爺が仕掛けた雑魚取り用のかごに犬が入っていたり、最初から爺婆が飼っていたりという設定もある。この犬が隣の爺に殺され、良い爺が墓印に植えた木で作った臼で餅をつくと小判が溢れ出るという話、または、墓印の木が大きく育ち不思議な実がなり、それらから金銀財宝が落ちてくるという話もある。さらに、東北地方を中心に、撒いた灰が花を咲かせるのではなく、灰が雁の目に入り大量の雁を手に入れる「雁取り爺」という話もある。中国四国九州の一部では、墓印に植えられた竹や木が天まで伸びて天の金蔵を突き破る話もある。

「花咲か爺」の題名は、江戸時代後半に「赤本」で「枯れ木に花咲かせ爺」が掲載されてから広まっていった。「赤本」は、当時お正月のお年玉として子ども向けに売られていた。この頃から文章化されている。しかし、東北地方で伝承されてきたこの類の話は、語り手は「犬こむかし」とか「くいごこ(子犬の幼児語)むかし」という題名で語ることが多い。

●「隣の爺」型

「花咲か爺」「こぶとり爺」「にぎりめしころころ」等、正直者が恵みを得て、それを真似る欲深い隣人は、必ず失敗する。これは日本特有の形式で、海外では兄弟葛藤型が一般的である。

※参考文献『日本昔話ハンドブック』稲田浩二・稲田和子編（三省堂）／『子どもに語る日本の昔話②』稲田和子・筒井悦子著（こぐま社）

●昔話を楽しむ

・「屁ったれ嫁さん」(『みちのく民話まんだら』小野和子作／北燈社より）語り　黒田真由美

・「重箱ばばさん」(『続・菊池むかしむかし』菊池市高齢者大学編／第一法規出版より）

読み手　辻　由美

（報告　辻　由美）

〈参加者から〉 松谷みよ子の『山おとこのてぶくろ』（ほるぷ出版）で山おとこが「嘘つかない嫁っこほしかった」と言うところが好き▼熊本の昔話で雁回山が舞台の「九十九の谷」のその後の話を母が語ってくれた▼『日本のむかしばなし』（のら書店）にも「花さかじい」が載っている。瀬田貞二の文は丁寧▼昔話は「次は？」「次は？」と思わせるように進むので、子どもたちは引き込まれる▼「花咲か爺」に絞って様々な解説を聞くことができてよかった▼お婆さんから昔話を聞いて育った体験はうらやましい▼「屁ったれ嫁さん」は単純に笑って聞くが、お話に込められた辛い立場にいた人たちの思いに深くうなずく▼昔話は現代にも通じる。生きる力を子どもたちに与えてくれる▼『さるじぞうほいほい』（ポプラ社）など、最後にいい人が勝つお話は心地いい▼益城にある左の目神社に伝わっているお話に生きる知恵を感じた▼「昔々…」と始めると子どもたちが集中する。語りは特別な空間▼昔話から生きていく上での教訓を学び、自分の行動原理になっている気がする▼昔参加した「昔話を楽しむ九州沖縄交流会」「くまもとお話の交流会」で全国や九州の語り手たちの語りを聞いた。

〈堀畑真紀子さんより解説と感想〉

「花咲か爺」と「屁ったれ嫁さん」の共通点は、犬と屁という異能、特別な力によって至福がもたらされるということ。同時に、「屁ったれ嫁さん」は、異能という神威が笑話になっていくことに気づいた。「屁ったれ嫁さん」は、元々『日本霊異記』という平安初期の仏教説話の「力女」という話から来ている（稲田浩二）。強い力が屁に変わり、笑話になった。子どもに語るときに一斉に変わったのではないかと捉える説がある。神威が変化していくことが興味深い。一方、「花咲か爺」には、人間としてのリアリティーがある隣の爺さんがいる。隣の爺さんは、知恵がなく、真似ばかりして結局ダメになる。意地悪で欲深い。人間の心を表している。しかし、善良な爺さんだけでは物語は発展しない。隣の爺さんに焦点を当てると、例えば、一寸法師のずる賢さともいえる知恵で生き抜く力へと展開していくと考えられる。

＊

昔話のことを辿っていると、「幼い頃のことを思い出す」という参加者の言葉に、現代の機器から少し離れていた時代のゆっくりと流れる時間を感じた。

（報告　木村一惠）

◆講座報告

幼い子と楽しむ絵本　０歳、１歳児の絵本

日　時　2月21日（水）10時～12時
会　場　熊本市民会館シアーズホーム　夢ホール第1会議室
参加者　11名
担　当　古上美智代

○松居直『絵本のよろこび』（ＮＨＫ出版）より

「情愛のこもった声の言葉が赤ちゃんの気持ちを目覚めさせ、心を育てます。人間の想像力もこの延長上に芽生えます。親に絵本を読んでもらうことは〝共に居る〟ということ。親と子は言葉を共有し、歓びを分かち合い、お互いを受け入れます。この体験は子どもに生きる力を与え、同時に絵本を読む親にも生きがい感と歓びを味わわせてくれます」

２カ月未満の赤ちゃんが『三びきのやぎのがらがらどん』（福音館書店）に喜んだ例を紹介。

○ブックスタート

１９９２年にイギリスで始まった０歳児健診で絵本を渡す運動。日本には２０００年に紹介された。赤ちゃんと保護者が絵本を介して心ふれあうひとときを持つきっかけをつくってくれる。

○絵本の選び方

＊絵が大きく色合いがはっきりしたもの
＊言葉にリズムがあるもの
＊くり返しがあるもの
＊その子が興味・関心を持つもの

（それぞれに絵本を紹介）

０歳、１歳児の場合は季節や行事にこだわるよりも、乳児の基本的な生活を中心とした絵本選びを優先し、季節感はわらべうたや童謡で楽しむのもよい。

○遊びにつながる絵本（おはなし会では読んだあと親子遊びをする）

・『ぺんぎんたいそう』齋藤槙 作（福音館書店）
・『こちょこちょこちょ』うちだりんたろう・ながのひでこ作（童心社）
・『ぴょーん』まつおかたつひで作（ポプラ社）
・『あかちゃんたいそう』鈴木まもる作（小峰書店）

○わらべうた絵本

佐々木宏子『母のひろば６５２号』（童心社）より

「言葉のなかにうめこまれているリズムやメロディをお母さん、お父さんの声でよみがえらせ、ともに体を動かし、表情をやりとりしながら、描かれた絵を赤ちゃんといっしょに、イメージの世界で動かし完成します。読み方、歌い方に正解はありません。〝わが家流〟で、赤ちゃん時代の貴重な一冊として完成させてください」

○童謡などのうた絵本

幼い日に歌ってもらった歌を口ずさむと、その時の情景やその人のことを思い出す。絵本を読んでもらった時と同じ。お母さん、お父さんの声で歌ってあげてください。

（報告　古上美智代）

〈参加者の感想〉

『どうぶつのおやこ』（福音館書店）は、背景を省いたリアルな絵が写真とは違って幼い子に印象付けることを知った▼子育てサロンの若い母子に読むための絵本選びに役立つ話だった▼ブルーナの絵本（福音館書店）には興味を示さず、『いないいないばあ』（童心社）は楽しんだ。子どもの興味はそれぞれだと思う▼『ぶーぶーぶー』（福音館書店）の作者小風さちさんは、これから世界を生きていく赤ちゃんへ、絵本が心や精神の糧となってほしいとおっしゃっていた▼授乳時わらべうたをよく唄い、子育てを助けられた▼子どもが2歳の頃、親子で繰り返し読んでいた絵本の言葉をそのまま発していた▼おはなし会で、お母さんに笑顔があれば赤ちゃんも嬉しいのだと思った▼絵本に書かれている「りんごちゃん」など、「ちゃん」付けで読むことに抵抗がある▼作家に著作権があり文のまま読むべき。気になる言い回しや馴染めない本は選ばないのも選択肢の一つ。そのまま読んでも子どもは賢いので果物を「ちゃん」付けで言わないのは年を経て分かる▼『ぐりとぐら』（福音館書店）の歌は、下手でも節をつけて楽しんだ▼『らっこちゃん』（福音館書店）の「すやすや」の頁で1歳児が寝ころんだ▼図書館に0歳児、1歳児が訪れ、親子で音やリズムを楽しめる空間がある▼乳幼児向きの絵本も学びたい▼「こぐまちゃん」絵本（こぐま社）や『いたずらきかんしゃちゅうちゅう』（福音館書店）は、遊びながら体感していた絵本▼赤ちゃんのおはなし会では、途中で動いたり声を出したりしてもいいと思っている。何か一つでもおはなし会で赤ちゃんの耳に残るといいと思う。

（報告　有久賢治）

◆オンライン講座　**第3回「グリム童話の魅力」**

日　時　2月25日（日）10時～12時

講　師　竹内識晃（東京家政学院大学非常勤講師）

受講者　5名

〔講師から〕

前回の講座から、『子どもと家庭の童話集』（通称「グリム童話集」1857年）から1話を選び、比較民話学の観点から、話を丁寧に読み解き、その魅力をお伝えしています。今回取りあげた話は「赤ずきん」（KHM26）です。

昔話の国際比較では、AT番号／ATU番号が使われています。アールネ／トンプソン『昔話のタイプ』（AT）や、H・J・ウター『国際的昔話のタイプ』（ATU）の分類番号を知ることで、類話の検索が容易になります。なお、グリム童話の「赤ずきん」はAT333／ATU333に分類されています。

グリム童話には「赤ずきん」の話が2話収められていて、第1の話は、よく知られた「赤ずきん」の話です。第2の話では、赤ずきんは狼の誘いに乗りません。

グリム原注では、ペローとロマン派のルートヴィヒ・ティークの童話劇「小さな赤ずきんの生と死」（1800年）について言及され、ボ

ルテ／ポリフカ『グリム兄弟の「子どもと家庭の童話集」注解』（Ｂ／Ｐと略記）では、スウェーデンの「赤ずきん」バラード（物語詩）の悲劇的な結末が紹介されています（高木昌史編著『決定版グリム童話事典』三弥井書店、２０１７年）。「赤ずきん」の類話は、Ｂ／Ｐによると「フランスに圧倒的に多く、他にオランダ、イタリア、ルーマニア等にも分布」（高木、前掲書）しています。

また、モティーフとしての「狼」を、ヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』（高木、前掲書）から紹介し、ドイツの「人狼（Werwolf）」についても触れました。

グリムの「赤ずきん」の類話として、シャルル・ペローの『過ぎし昔の物語ならびに教訓』（通称「ペロー童話集」１６９７年）から、「赤ずきんちゃん」（新倉朗子訳『完訳ペロー童話集』岩波書店、１９８２年）を読みました。

新倉朗子氏は、ペローの再話の特徴として、「おばあさんになりすました狼と赤ずきんの会話の巧みな工夫」「決まり文句での古風な単語の使用」「巧みに古語を使った『赤ずきんちゃん』という題名のつけ方」の３つを挙げています。また、フランスの昔話研究者ポール・ドラリュが、「グリムにこの話を語ったのがフランス系の女性であること、グリムの話以外の伝承がドイツにはないことなどを確かめ」たことも紹介しています（新倉、前掲書）。

次に、フランス民話「娘と狼」と「お婆さんの話」（樋口淳／樋口仁枝編訳『シャルル・ペローとフランスの民話』民話の森、２０２３年）を紹介しました。

「娘と狼」は、１８７４年に語られた話です。この話では、奉公に出ていた娘の年季が終わり、家に帰る途中の森で狼に出会います。狼が家に先回りをする点は同じですが、狼の犠牲となるのは母親です。狼は娘に母親の肉を食べさせ、ぶどう酒として血を飲ませてしまうのです。

「お婆さんの話」は、１８８５年頃に語られた話です。この話では、娘が出会うのは狼ではなく、ブズー（狼人間）です。娘がブズーを騙して逃げてしまう逃走譚になっています。

フランスで伝承された２話では、主人公に名前がなく、「小さな娘」として語られます。

今回の講座では、グリム童話の「赤ずきん」をペロー童話やフランスの民話と比較してみました。

グリム童話では、通りかかった狩人が、狼の腹を切り開き、赤ずきんとおばあさんを救い出すというモティーフがあります。この「腹を切り裂かれる狼」のモティーフは「狼と七匹の子山羊」（ＫＨＭ５）にもあります。

ペロー童話では、赤ずきんやおばあさんを狼の腹から救い出すという「救済」のモティーフがなく、結末が教訓と深く結びつく話になっています。「赤ずきんちゃん」の話は、『ペロー童話集』の中で「ただ一つの不幸な結末を持つ話であり、ただ一つ子どもを意識して書かれた警告の話」（新倉、前掲書）なのです。

「赤ずきん」の話は、ペローの再話により娘が「赤ずきんちゃん」と命名され、グリム童話で赤ずきんとおばあさんの救済が語られたことで子ども向けの話として広まっていったのだと考えられます。

（竹内識晃）

［受講者から］

「赤ずきん」について深く知ることができ、子どもに語る楽しみが増した▽ペローとグリムの「赤ずきん」の違いがよく分かった▽「口承文学への理解を深め、子どもに自信を持って絵本を手渡せるようになる」という講座の目的に感銘した――などの感想や質問が尽きず実り多い講座だった。

（横田恵美）

4月～5月の活動・講座・会合の案内

○おはなしボランティア「びわの木」活動
・4月5日（金）11時～11時半
熊本市立図書館（0歳・プレママ・プレパパ）

○第1回研究会活動検討会（オンライン）
・日時　4月14日（日）10時～12時
研究会活動の企画や意見交換をします。参加希望の方は左記メールアドレス宛に4月12日までにお申し込みください。
メール　zoom@kodomonohon.org

○開講講座
・日時　4月24日（水）10時～12時
・会場　熊本市立図書館集会室
今年度の講座と研究会活動をご紹介します。非会員の方も無料でご参加いただけます。

○「日本の昔ばなしを読む」（公開講座）事前学習会
・日時　5月15日（水）10時～12時
・会場　熊本市立図書館集会室
・課題本「ねずみのすもう」

★非会員の方は参加には事前申し込みが必要です。講座名、参加者のお名前、連絡先を明記の上、メールでお申し込みください。場所、スケジュールについては、お越しになる前に必ずホームページでご確認ください。
メール　kouza@kodomonohon.org

本はともだち！

3月発行の総合文芸誌『ＫＵＭＡＭＯＴＯ』第46号に、「熊本子どもの本の研究会40年のあゆみとこれから」が掲載されています。この春に「こども本の森　熊本」が開館することに合わせた特集の中の一つです。40周年というタイミングで、私たちの活動を紹介する素晴らしい場を与えていただけたことは本当に幸運でした。文化講演会／宇城の高濱和夫会長のご紹介によるもので、地域のネットワークのありがたさが、身に沁みました。研究会の掲載記事はホームページで紹介しますが、本特集は、10編の記事で構成されていますので、雑誌本体も是非ご一読いただければと思います。

本件のお話をいただいたのは、昨年暮れも押し詰まる時期でした。理事長は務めているものの、実際の活動にはこれまであまり参加できておりませんでしたので、この原稿作成は、私自身にとって、研究会のこれまでの活動を学ぶ非常に良い機会となりました。具体的には、年末に熊本に帰った際に、「初茜」の各号、「みんなあつまれ」、「会報」の一部を東京に持って帰り、それらを参考に、これまでの各年度の主要な活動とお世話になった方々のお名前をエクセル表に書き落とすことから始めました。例会、おはなし会、著名な方々を招いての公開講演会。さらには、「昔話を楽しむ九州・沖縄交流会」、「熊本『お話』の交流会」の立ち上げなどなど。よくぞこれだけの活動を実施してきたものです。研究会活動を支えてきていただいた皆様に感謝いたします。

今回の記事をまとめる中で最も感心したのは、会報「子どもの本」、機関誌「初茜」、情報誌「みんなあつまれ」、さらには『神話的時間』をはじめとする5冊の単行本、という形で、活動の記録が整理されているということでした。これらがなければと思うと、記録を残すことの重要性を痛感いたしました。今回の寄稿をきっかけに、ここ10年間の活動内容を整理し、「初茜」32号の形で残すことで、活動の記録をさらにつないでいければと思いました。引き続き、よろしくお願い申し上げます。

（横田　真）

■編集＝金子・上林・横田　《イラスト》安田

特定非営利活動法人
熊本子どもの本の研究会　発行
〒861-8029
熊本市東区西原1丁目15の24